

書評

モバイル・ライブズの青春群像

岩城けい (2023) 『^{エム}M』 集英社

川上 郁雄*

© 2024. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

1. 『Masato』『Matt』から『M』へ

本書は、豪州メルボルン在住の日本人作家、岩城けいさんの小説である。この本の帯に次の説明がある。

父の転勤にともない12歳でオーストラリアに移住し、現地の大学生となった安藤真人。憧れていたはずの演劇の道ではなく就職を選ぼうとしたところ、マリオネットを制作しているアビーと出会い、人形劇の世界に誘^{いざな}われる。日本人としてのアイデンティティの問題に苦しんできた真人のように、「同じアルメニア人と結婚を」と刷り込まれてきたアビーもまた、出自について葛藤を抱えていた。互いを知りたい、相手に触れたい。しかし、境遇が似通うからこそ、抱える背景の微妙な差が、猛烈な「分かりあえなさ」を生み……。[話題の既刊『Masato』『Matt』につらなる、「アンドウマサト三部作」最終章!]

この帯文にあるように、この作品は、安藤真人／アンドウマサトを主人公とする作品群の最新作である。2014年に文芸雑誌『すばる』に発表された小説「Masato」は翌年に単行本とな

* 早稲田大学名誉教授 (Eメール: kawakami@waseda.jp)

り、2017年に「第32回坪井譲治文学賞」を受賞している。同年、集英社文庫から『Masato』(2017)として出版され、今なお多くの方に読まれている。

第1作の『Masato』では、主人公のマサトは日本人の両親のもと、日本で生まれた。その彼が小学校の5年生の時に父親の仕事の関係で、突然、家族とともにオーストラリアへ移住したところからストーリーが始まる¹。英語のわからないまま現地の学校に入学し、悪戦苦闘するマサトの様子は、「移動する子ども」研究の好例と思われた。

私が岩城作品を最初に知ったきっかけは、大学院のゼミ生の一人が、「先生の研究とそっくりの小説です」とこの本を勧めてくれたからだった。さっそく読んでみて、衝撃を受けた。日本で日本語だけで育ってきた小学生が英単語も英文法も習っていないまま、英語の世界に入り、第二言語の英語を習得していく様子がリアリティをもって鮮明に描かれていたからだ。また、そのリアリティは、私の娘が英語を知らないまま小学校の1年生でオーストラリアの現地校に入学した時の経験と重なるし、日本の学校に突然編入学してくる外国籍の子どもたちの様子とも通じていると思われたからだ。

何よりショックだったのは、第二言語として日本語を学ぶ子どもの研究論文をいくら書いても、この作品にあるようなリアリティは書けないと思われたことだった。この作品は文学的にも高く評価された。

この『Masato』に出会って以来、私は岩城さんの「物語世界」に魅了され、「移動する子ども」研究に文学作品研究を取り入れるようになった。まず、作品を読み、作品の書評を書くことから始めた²。

『Masato』の次に文芸雑誌「すばる」に発表され、のちに単行本となった小説『Matt』^{マット}(2018)では、同じ主人公のマサトが日本の高校生にあたるセカンダリーの10年生になった時の学校の様子が1年間にわたって描かれている。この作品も、前作と同様に、マサトの視点で物語が展開していく。前作ではまだ英語が十分ではなかったマサトは、すっかり英語が流暢になり、日本語より英語が中心の生活になっていた。そのマサトの生活に、両親や姉などの家族の様子が豪州移住後に変化していく様子が加えられ、まさに移動を経験した「移動する家族」

1 「ぼくは地元の公立の小学校の五年生に転入した。日本では六年生になるはずだった。いやだわ、まるで落第したみたいじゃないのってお母さんはすごくいやそうだった。」と『Masato』の冒頭にあり、6年生になる直前に渡豪した設定になっている。物語ではマサトの誕生日は7月18日となっている。よって、渡豪時のマサトの年齢は11歳となる。

2 川上(2018)、川上(2020)。

のストーリーとなっていく。さらに、日本と豪州の間でマサト自身がアイデンティティに思い悩む小説の後半では、彼自身の顔写真がついた日本のパスポートをキッチンバサミで切り刻むシーンが胸に迫る。

2. この作品『M』

私は、マサトが大学生になったらどうなるのかを読んでみたいと思っていた³。そのマサトが大学生となった物語が、この小説『M』である。

この作品で、マサトは大学3年生として登場する。ここまで成長したマサトは、「自分は一体いつまで日本人をやらなきゃならないのだろうか、^{はらわた}腸が煮えくりかえりそうになる。」(p. 73)と語る。

この小説には、もう一人重要な登場人物がいる。オーストラリアで生まれ育ったアルメニア人の女子学生、アビーである。アルメニアに行ったこともなく、オーストラリアで成長したアビーが言う。「私は結局、アルメニアにもオーストラリアにもシドニーにもメルボルンにも属して (belong) いない。親は世界の果てにいても祖国アルメニアに終生「belong」しますが、わたしはどこにも「belong」したためしがありません。」(p. 77)

物語はこの二人を軸に展開する。この物語にはマサトの成長と心情を読者に理解させるために、アビーの登場が不可欠だったと思われる。アビーは言う。

わたしは、父と母が姉を連れてこちらへ移住してきた翌年、ひょっこり生まれた子どもです。移住の理由は要約すると、ソビエトの崩壊後、国内の情勢が安定しなくなって、そこで新天地、といったところでしょうか。(中略)

でも、親子でこんな大きな大ゲンカをしている最中にも、親が感情の極みをもってわめき散らしているロシア語が、わたしにはまったく口にできないことが不思議でたまりませんでした。わたしは、一体、何語に育てられたのでしょうか？ (pp. 122-123)

アビーは、さらに言う。

3 2019年12月に早稲田大学で開かれた研究会(「早稲田こども日本語研究会」)で私は岩城けいさんと対談をした。その時、岩城さんは、小説を書いていくと、主人公のマサトが勝手に動き出すんですよと笑って話してくれた。私は、マサトが大学生になったらどうなるのかを読んでみたいと伝えた。

だから、私たちって、『ダイバーシティ』とか『マルチカルチャー』とか『バイリンガル』で、あっさり片づけられてしまうじゃない？ いろんな人種が歩いているだけで『ダイバーシティ』、いろんな国のレストランが並んでいるだけで『マルチカルチャー』、英語以外の言葉が話せたら『マルチリンガル』。だからなんでもそれでひとくく一括りにして、あとは知ったかぶりの知らん顔。(p. 155)

アビーの心情はマサトの心情にも共振する。「おれ、日本人やめたくなること、あるんだ」(p. 159)と語るマサト。「わたしの場合、英語を話しているときは『オージー』だけど、家の外で親にロシア語で話しかけられたとたん『オージー』じゃなくなって『移民』」(p. 162)と語るアビー。

そのように揺れる心情を持ち互いに求め合う若者同士はどうしたら理解し合うのだろうと、作者は問いかける。

「わたし、あなたに触ってみたいの。その前にあなたをきちんと見せて」(p. 210)と言うアビー。「おれもきみに触りたいんだけど、いい？」(p. 212)と言うマサト。マサトは彼女の中に入ろうとして、彼女が初めてだということに気づく。そして思う。「人は傷つけたり傷つけられたりしなければ、本当に相手を理解することはできないのだろうか。」(p. 213)

3. モバイル・ライブズの青春

この作品における、この最後のシーンが生まれてくるのは、移動する人たちの青春のリアリティを描く文学作品だからであろう。

ただし、この作品の魅力はそれだけではない。岩城さんのこれらの作品群を文学作品として鑑賞するだけではなく、私は「移動する子ども」学の視点から考えてみたいと思う。

川上(2021)は『Masato』『Matt』の作品を、「移動する子ども」「移動する家族」に関する「アカデミックな研究」として取り上げ、その意味を次の3点にまとめて指摘した。

- (1) 著者がモバイル・ライブズの中で創作活動をしている点
- (2) 「移動とことば」のバイフォーカルな軸で、つまり移動と移動にともなう複数言語環境で生活する物語世界を描いている点
- (3) 「移動とことば」を特徴とするモバイル・ライブズに生きる人々の思い、葛藤、情念、不安、希望など主観的な意味世界と、人としての生き方とアイデンティティを描いている点

マサトが主人公の小説として3冊目になるこの作品にも、上記の3点は当てはまるであろう。

(1)の「著者がモバイル・ライブズの中で創作活動をしている」という点は、岩城さんが物理的に移動しながら作品を書いているという意味ではない。空間、言語間の移動に加えて、インターネットによるサイバー空間で日常的にさまざまな移動を体験しながら想像力を発揮して創作の世界を縦横無尽に躍動しているという意味である。この作品にも主人公の一人、アルメニア人のアビーのアルメニアについて歴史や文化、暮らしや移民の様子などさまざまな情報を集め、想像力を膨らませたとされる。この作品も前作の2作品と同様の創作環境から生まれた作品と言えよう。

(2)の「移動と移動にともなう複数言語環境で生活する物語世界を描いている点」は、この作品においても顕著な特徴となっている。特に今回はマサトのほかにオーストラリアで生まれ育ったアルメニア人の女子学生、アビーを登場させた点が注目される。彼女はアルメニアに行ったこともなく、オーストラリアで成長したという設定である。これらの3作品には多数の「移動する子ども」が登場するが、それぞれが異なる移動を経験し多様な人生の軌跡を持ち、それぞれ異なる思いを抱きながら生きている。この作品では、そのリアリティをマサトとアビーが体現している。

(3)の「モバイル・ライブズに生きる人々の思い、葛藤、情念、不安、希望など主観的な意味世界と、人としての生き方とアイデンティティを描いている点」は、今回は特に顕著であった。大学生となったマサトとアビーの言動や思いが丁寧に描かれているが、二人の軌跡と環境は必ずしも同じではない。その描写は、マサトとアビーと同様の「移動の経験」を持つ若者が無数にいることを示唆している。

この作品は、子ども時代から複数言語環境で成長した若者たちのモバイル・ライブズのリアリティを描いている。

帯文には次の文がある。

多民族国家の生きた声^{すく}を掬う在豪作家が贈る、力強くみずみずしい《越境青春小説》

この「越境青春小説」がどのような意味かはわからない。近年は「移民文学」や「越境文学」という語も聞く。ブラジルやアメリカ合衆国で暮らす日系移民の文学を意味することもある。日本国内では「在日文学」などもある。多くが祖国を離れ移住国で暮らす人々の生活や人生を

テーマにした作品である。また、作家自体が移動しながら作品を書く場合もある(青木, 2010)。多和田葉子さんや村上春樹さんもその中に含まれるかもしれない。

しかし、岩城さんの作品はそれらの文学作品群とはやや異なる。なぜなら岩城さんの作品は、子どもの時から複数言語環境で成長する人のことばの課題や、そこから生まれる子どもの心の葛藤や不安、迷い、アイデンティティ、生き方が描かれているからである。まさに現代社会特有のモバイル・ライブズに生きる子どもたちの生をテーマにしており、その意味で、「移動する子ども」学の研究テーマと密接に関わっている。この作品は「移動する子ども」学を考える多くのヒントを与えてくれる「力強くみずみずしい」研究成果なのである。

文献

青木保 (2010). 『作家は移動する』 新書館.

岩城けい (2017). 『Masato』 集英社文庫.

岩城けい (2018). 『^{マツト}Matt』 集英社.

岩城けい (2023). 『^{エム}M』 集英社.

川上郁雄 (2018). 書評：モバイル・ライブズを生きる「移動する家族」の物語——岩城けい (2017) 『Masato』 集英社文庫 『ジャーナル「移動する子どもたち」——ことばの教育を創発する』 9, 40-46. <http://hdl.handle.net/2065/00062903>

川上郁雄 (2020). 書評：岩城けいの世界を読む——『ジャパン・トリップ』(角川書店, 2017), 『^{マツト}Matt』(集英社, 2018) 『ジャーナル「移動する子どもたち」——ことばの教育を創発する』 11, 100-113. <http://hdl.handle.net/2065/00074684>

川上郁雄 (2021). 第8章 モバイル・ライブズを生きる——岩城けいの世界を読む 『「移動する子ども」学』(pp. 153-177) くろしお出版.